本論文は、中国甘粛省所在の麦積山石窟、第 127 窟に描かれている「シュヤーマ本生図」について、山水画の起源とする仮説を論証しようとしたものである。論文の構成は、麦積山の地理的・歴史的背景から書き起こし、「シュヤーマ本生図」が展開する第 127 窟の時代や仏像と仏画、そしてそれらの縁起についての記述が続く。そののちに「シュヤーマ本生図」が、なぜ山水画の起源として評価できるのかについて、図像学的にその構図や技法が定義され、自然と人物との関係に遠近法の技法がみられる点が強調され、最後に、山水画の起源として認められると結論づけている。

審査では、本図は一応、仏教説話であるため、いきなり山水画の起源とするよりも、その過渡的要素として「早期山水画」を定義することに力点を置くべきとする意見が述べられた。そのほか、絵画史における北朝と南朝との影響関係、詩と絵画との関係など、本図が描かれた時代における興味深い諸要素が指摘された。本論は、中国山水画の起源を、約半世紀以上も遡らせる意欲的論文であるため、修士段階では結論の出せる問題ではないとも考えられるが、今後の研究につながる興味深い議論であるため、以上のような評価を与えた次第である。